

陳垣と桑原隲蔵

——「桑原文庫」中の陳垣寄贈書をめぐって——

竺 沙 雅 章

わが国東洋史学の創始者の一人桑原隲蔵は、若き日の陳垣と交わりがあり、その業績を高く評価していた。彼は一九二四年、陳垣から寄贈された『元西域人華化考』を書評し^①、その文章の冒頭において、「陳垣氏は現在の支那史学者中尤も注意に価する学者である。支那にも柯劭忞氏の如き老大家を始め、幾多の史学者があるが、陳垣氏程吾人の注意を惹く学者は見当らぬ」と述べている。さらにその研究には二つの特色があるとして、中国と外国との関係を研究の対象としていること、研究方法が科学的であることを挙げる。このように称讃するのは、桑原としては極めて珍らしいことであって、同じく中国の学者であつても柯劭忞、梁啓超の業績に対しては、敵しい批判を行なっている。それらの文章と読みくらべても、桑原が陳垣をいかに高く評価していたかが知られる。二人の間には手紙の遣り取りも行なわれていたと思われる

が、『陳垣来往書信集』（陳智超編注、上海古籍出版社、一九九〇年）によれば、往復書簡は現存していないようである。ところが京都大学文学部東洋史研究室の「桑原文庫」中には、一九二四年に陳垣から桑原に贈られた三部の書物がある。このことは桑原の論文に記されているが、それらが今なお現存していることは、わが国でもほとんど知られていない。ここに三部の書物を紹介して、陳垣と桑原隲蔵との学術上の友誼と、それが東洋史学に果たした役割とを明らかにしたい。

① 「陳垣氏の『元西域人華化考』を読む」（『史林』九一四、一九二四年原載、『桑原隲蔵全集』（以下『全集』と略称）第二卷三六一～三六九頁所収）。また陳彬和訳「読陳垣氏之『元西域人華化考』」（『北京大学研究所國學門周刊』一一六、一九二五年）があり、拙稿「陳垣手桑原隲蔵」の訳文は陳氏訳に拠っている。

② 「柯劭忞の新元史帖木兒伝」（『全集』第二卷三八六～三九〇頁）、

「桑啓超氏の『中国歴史研究法』を読む」（同書四六八～四七九頁）参照。

一

はじめに二人の略歴を述べておく。まず桑原隲藏は一八七〇年福井県敦賀市に生まれた。第三高等学校を経て東京大学（当時は帝国大学）文科大学に入学して、漢文科で学んだ。一八九六年、同大学を卒業ののち、東京高等師範学校教授となり、ついで一九〇一年、開設されて間もない京都帝国大学文科大学の教授に招かれ、東洋史学第二講座を担当した。一九三〇年に京都大学を定年退官し、翌三一年六十一歳で病没した。彼は旧来の漢学的な中国史学に厭き足らず、西洋史学の方法論を採り入れ、ひろく世界史的視野から中国史を見直そうとする新しい東洋史学を始めた。従ってその研究は特に東西交渉、文化交流等に重点が置かれ、漢文文献はもとより、西方の諸文献からもひろく史料を搜集し、緻密で科学的な考証を重ねた多くの業績を発表した。つまり彼のいう陳垣の研究特色は、実は彼の特色でもある。代表作『蒲寿庚の事蹟』（上海、東亜研究会、一九二三年初版）は、英文及び中文にも翻訳された名著である。彼のすべての論文著書は『桑原隲藏全集』五巻別冊一卷（岩波書店、一九六八年）に収められている。没後、

彼の遺志によって全蔵書は京都大学文学部東洋史研究室に寄贈され、「桑原文庫」として別置されている。^②

陳垣は、字は援庵、広東省新会県の人。一八八〇年生まれなので、桑原よりちょうど十歳年下である。十七歳のとき京師に赴いて順天郷試を受けたが及第でまず、帰郷して小学、中学の教師となった。また医学を学んで光華医学院を創設し、あるいは『時事画報』『震旦日報』を主編して革命を鼓吹した。辛亥革命後、北京に出て、はじめは政治活動も行なったが、その後専ら教育と研究の仕事に従事し、北京大学、燕京大学、北平師範大学等で講授し、輔仁大学校長に任ぜられた。解放後も北京師範大学校長、中国科学院歴史研究所所長はじめ多くの要職についた。一九七一年、九十一歳で没した。彼は元史、東西交渉史の実証的研究のほか、特に中国宗教史では新しい研究領域を開拓し、歴史文献学の分野では『史諱举例』『二十史朔閏表』などの中国学必携の工具書を著した。十数種の単行本のほか、論文の一部を取めた『励耘書屋叢刊』（一九三四年）、『陳垣學術論文集第一集・第二集』（中華書局、一九八〇年、八二年）があり、孫の陳智超氏（中国社会科学院歴史研究所研究員）が整理編纂した前掲『陳垣来往書信集』、『道家金石略』（文物出版社、一九八八年）が近年出版された。また受業生たちによる『励耘書屋問學記——史學家陳垣的治學』（北

京、三聯書店、一九八二年）は、彼の学風をうかがうによい。^③

なお一九九〇年十二月、陳垣の郷里に近い江門市五邑大学において、「紀念陳垣教授誕辰一一〇周年國際學術研討會」が開かれ、筆者も招かれてこれに参加した。「桑原文庫」中の陳垣寄贈書を紹介したからである。筆者の報告は、香港大学馮錦榮氏訳、暨南大学張其凡氏校定によって、『歴史研究』一九九一年第三期に掲載された。本稿はその時の報告を骨子としているが、その後には得た知見をも加えて増訂したものである。以下に前稿とあるのは、学会で発表した論文のことである。

- ① “On Pu Shou-Keng (蒲寿庚)”, Tokyo, Toyo Bunko, 1928. 陳裕菁訳訂『蒲寿庚考』（上海中華書局、一九二九年）、馮攸訳『唐宋時代中西通商史』（上海商務印書館、一九三〇年）。
- ② 『全集』別冊「桑原隲藏博士所藏圖書目錄」（筆者編）には、一九六八年に桑原武夫氏より追加寄贈されたものも含まれている。
- ③ 陳垣の事蹟については、王明沢「陳垣事迹著作編年」『紀念陳垣校長誕生一一〇周年學術論文集』、同籌委會編、北京師範大学出版社、一九九〇年、四五四～五二八頁）が最も詳しい。

二

陳垣から桑原隲藏に贈られた三部の書物とは、『元西域人華化考』稿本、『心泉學詩稿』六卷、『釣磯詩集』四卷である。つぎにそれぞれの書物について紹介しよう。

1、『元西域人華化考』稿本

これは綫装二冊、二五・五×一九釐、油印本、表紙は灰色。上冊の表紙に陳の自筆で、

桑原隲藏先生指正／陳垣敬呈十二年十二月

と記されている（図1）。表紙及び毎篇の標題はすべて稿本とする。每半葉十行二十五字。第八の末尾に「十二年十月九日寫於／北京西安門外恒德廠」と記され、これによって本書完成の月日と場所とが分かる。周知のごとく、本書の前四篇すなわち上冊部分が

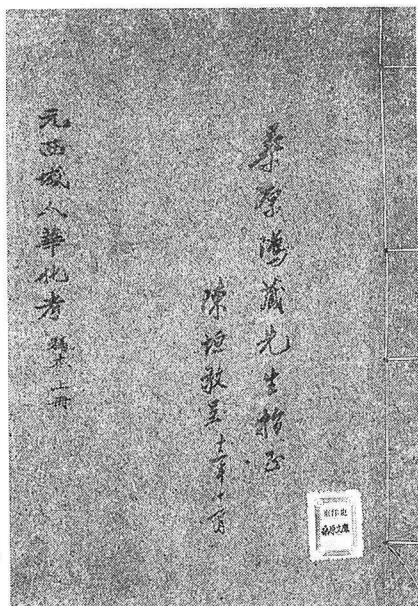


図1 『元西域人華化考』表紙

民国十二年（一九二三）十二月発行の『国季刊』第一巻第四号に掲載され、ついで四年後の一九二七年十二月になって後半の四篇が『燕京学報』第二期に掲載された。さらに一九三四年冬、『励耘書屋叢刊』第一集第一種として合刻された。従って、本書には油印稿本、排印本、刊本の三種が存するが、文章はそれぞれ異なるところがあり、後のものほど修改増補が多く加えられている。既に桑原に贈られたこの稿本でも、墨書の補正がみられる。

これが桑原のもとに届いたのは、一九二四年の初春であった。その年の八月に彼はこれを通読して、同年一〇月発行の『史林』第九巻第四号に、「陳垣氏の『元西域人華化考』を読む」と題する書評を寄稿した。『全集』第二巻三六一―三六九頁に収める。そのなかで、桑原は上記のごとく陳垣の学風を称讃したのちに、「この陳垣氏が昨年末に、『元西域人華化考』を起稿された。稿本の儘で、未だ学界には公表されぬ様であるが、吾が輩は今春幸いに著者からその稿本一部を惠贈された」（三六一―三六二頁）と記している。この時点でも、『国季刊』のこの号はまだわが国に到着していなかったようであり、『華化考』は日本の学界では全く知られていなかった。そこで「吾が輩は此の如き内容豊富で有益な好著が、一日も早く正装公刊されて、広く東西の学界に嘉恵されんことを切望して止まぬ」（三六四頁）と記している。その

論文の内容については、元以前に華化した西域人の一人として本書に挙げる安世通は、安息の人ではなくて安国出身とみられること、西域人華化の実例としては、他に北朝の乞伏保、唐代の迦葉志忠が挙げられること、元代の泰不華を西域人に加えるのは疑問であることが指摘されている。そして「他日この新著公刊の際に、吾が輩の所見をも参酌せらるる」（三六四頁）ことを希望した。筆者は前稿で、「恐らくこの書評の抽印本が陳垣に贈られたと思われるが、叢刊本でも以上の批判箇所は訂正はなされていない」と述べたが、事実、この抜刷が陳垣に贈られていたことが分かった。実は上記の学会の席で、陳智超氏に桑原の書信の有無についてたずねた時、手紙はないが論文抜刷はあったはずなので、後でコピーを送ってあげるとのことであった。果たして、昨一九九一年四月三十日付の手紙と、抜刷の表紙（図2）と本文一葉のコピーとが届いた。その抜刷は、他ならぬ『華化考』の書評であった。表紙左辺に「陳援菴先生、桑原隲蔵拜贈」との為書がある。また興味深いのは、いま一葉のコピー、すなわち一二一頁の上段五行目「題称雲棲下一碧万頃亭」の「称」字が消されて、その上方に、「海」とペン書きされ、誤植の訂正がなされていることである。陳智超氏によると、この海の字は陳垣の親筆であるという。つまり彼がこの論文に目を通したことが分かるのである。わざわざコ

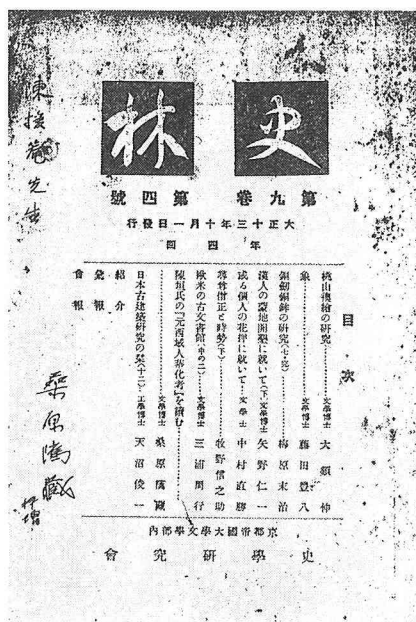


図2 桑原寄贈論文抜刷表紙

ピーして送って下さった陳智超氏の学恩に感謝する。

ところで本書には、文中の随所に朱筆の傍点が施され、欄外には「漢人与南人区别」(叢刻本第一葉裏第四行、以下同じ)、「嫌誇大」(第二葉裏第三行)、「西夏人華化当然耳」(第八葉裏四行)、「能輯佚文」(第十二葉裏第四行)、「丁姓」(第四十三葉第十行)、「猪与朱」(第六十四葉裏第十二行)等、桑原の評語や覚え書きがあり、また「？」を付したところ、小紙片を張ったところもみられる。その中で特に注目されるのは、

(1) 第三十二葉裏第一、第二行「一門兩代、凡九進士」に傍点、

欄外に「蒲寿庚論補欠」と朱書。

(2) 第百三葉裏第六、第八行「其国人柄用尤多……則無幾也」に傍点、欄外に「補蒲考」と朱書。

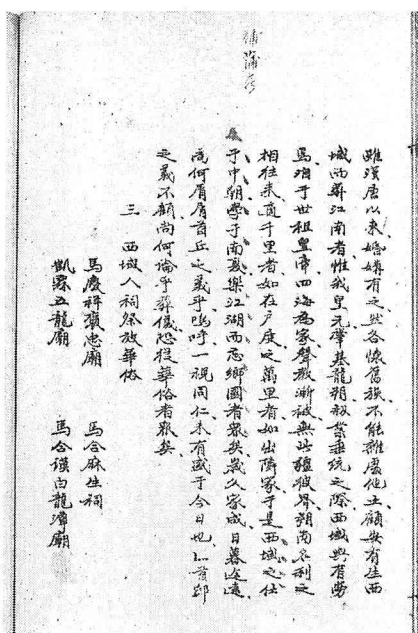
(3) 第百八葉表第四、第五行「西域之仕于中朝……忘郷国者衆」に傍点、欄外に「補蒲考」と朱書(図3)。

蒲寿庚論、蒲考とは、前掲『蒲寿庚の事蹟』に他ならない。この論文ははじめ『史学雑誌』第二十六卷第十号(一九一五)から第二十九卷第十号(一九一八)まで五回にわたって分載された。陳垣が『華化考』に、「近日本桑原隲蔵氏考寿庚事極詳尽」(第七葉表)として挙げるのは、この論文の方である。その後訂補を加えて、一九二三年十一月上海の東亞政究会から単行本として出版された。桑原が『華化考』を手にしたのは、単行本が出版されて間もないころであった。それだけにこの『華化考』を特に興味をもって読み、自著の訂補の材料となる文章を見出すごとに、傍点や朱書を施して、後日のための覚え書きとしたとみられる。彼は没する前年の一九三〇年まで、たえず『蒲寿庚の事蹟』の訂正増補を加えていたという。^①その原稿にもとづいて一九三五年、東京の岩波書店が増訂本を出版した時、毎章末に増補部分を付したが、上記の朱書の箇所は入っていない。わずかに「四、蒲寿庚の事蹟(上)」増補註「五」に、「唐宋時代、中央アジアより多く中国に

移住せし事は拙稿『元西域人華化考』の批評を参考すべし」（『全集』第五卷、一九七頁）とあるだけである。

それでは「補蒲考」等と記された箇所が全く利用されなかったかという点、そうではなく、実は別の論文「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」（『全集』第二卷二七〇～三六〇頁）（以下「西域人」）の史料として用いられているのである。この論文は、一九二六年『内藤博士還暦祝賀支那學論叢』に掲載されたものであるが、その骨子は既に一九二四年十二月の支那學會大会において、「中古支那に移住せし西域人に就いて」と題する講演で發表

図3 『元西域人華化考』桑原書込



されている。その極く短い講演要旨は、『史林』第一〇卷第一号（一九二五）一八五頁彙報欄に載せられているが、彼自身、右の論文中の「支那來住の西域人に関する講演」（『全集』二七八頁）に、「講演は中古として、隋唐宋元を包括したのを、本論文では時日の切迫や、紙数の制限等の事情の爲、隋唐時代と限った」と記しており、もとの講演は元代にまで及ぶものであった。^②

よると、この時講演に関する史料二十五種が陳列されたが、その中に「西域人蒲寿成の心泉學詩稿」（後述）、「中華民國陳垣氏の元西域人華化考」が含まれているので、講演のなかで陳垣の業績にも触れたようである。また『華化考』を読了し書評した直後であるから、『華化考』の影響が少なくなったと推測される。果たして「西域人」には、『華化考』及びその書評がよく引用されている。特に「元時代に來住したイスラム教徒」の項（二九一～九二頁）に、「仕宦や講學の目的を以て、西域から支那内地に來り、その儘永住帰化した者も頗る多かった」ことの証拠として、「民國の陳垣氏稿本『元西域人華化考』下冊、十六丁所引『麟原集』參看」（二九二頁）とするが、この箇所は上記(3)の朱書傍点するところと一致する。またその直前に引用する許有壬『至正集』の文章も(2)の傍点部分である。わずかに二例であるが、「西域人」が『華化考』を参考にしていること、その箇所に「補蒲考」と記されている

ることから、これが『蒲寿庚の事蹟』の統篇を目差した論文であることを示唆する。事実、この論文は『蒲寿庚の事蹟』同様に、内外の史料を博引旁証して明晰な論証を重ねた長篇であつて、『華化考』と双壁をなす、東西交渉史の名作である。本論文の中文訳が「隋唐時代西域人華化考」とするのは、蓋し適訳であろう。こうした両論文の密接な関係が、「桑原文庫」の『華化考』稿本によつてはじめて知られるのであり、この稿本は學術史上重要な書物といわねばならない。また筆者の知る限り、これはわが国に存在する唯一の稿本であり、その意味においても貴重である。

2、『心泉學詩稿』六卷

本書は、蒲寿庚の兄蒲寿成の撰。四庫輯本。『四庫全書珍本初集』に収められていて、現在では容易に閲覽できるが、かつてはわが国では見ることができず、ただ『四庫全書總目提要』によつてその存在が知られるだけであつた。そこで『蒲寿庚の事蹟』は「蒲寿成に『心泉學詩稿』六卷あり、予は未だその書を寓目する機を得ざれども云々」(『全集』二二三頁)と記さざるを得なかつた。陳垣はこの論文でその事を知り、四庫本を抄写して寄贈したのである。桑原は『華化考』の書評の末尾に、「吾が輩は本年(一九二四)の初春に、陳垣氏からその写本を贈与されて、始めて寓

目の機会を得た。同時に南宋の遺民で、蒲寿成の交友たる邱葵の『釣磯詩集』の写本をも惠贈された。茲に附載して感謝の意を表する」(『全集』三六八頁)と記している。

この陳垣寄贈の写本は、一帙綾裝一冊、二八・〇×二〇・四釐。帙の外題は陳垣の自筆である。表紙につづく副葉に、

桑原臨藏先生惠存／陳垣敬贈十二年十二月

と記されている。はじめに『四庫提要』を掲げ、つぎに四庫原本にはない目錄一葉がある。提要、本文とも每半葉十二行行二十三字、匡郭一三・三×一九・〇釐、書口下段に勵耘書屋とあり、全文に句点が施されている。全葉数は四十八葉。書き込み等は全く見られず、所藏者が極めて大切に扱っていたことがうかがわれる。ただ一箇所、卷四(第三〇葉表)「題海雲樓下一碧万頃亭」詩の欄外に、目印の小紙片が貼付されている(図4)のは、興味深い。この書物を手にした桑原は、早速通読して、『蒲寿庚の事蹟』の補足史料を求めたようである。事実、一九三五年増訂本の増補の項には、本書のことが三ヶ所に現われる。その一は、四の増補「六」に、「著者の遺稿に『蒲寿成の心泉學詩稿中に王舶使の名あり、参考を要す』と註記せり」との校者補記がある(『全集』一九七頁)。王舶使の名が見えるのは卷二の五言古詩、

舶使王会溪、太守趙見泰、九日領客柱顧山中、賦采菊東籬下

悠然見南山韻十首

上舶使監丞王会溪

の二首である。その二は、同「八」に、上記の「題海雲樓下一碧万頃亭」詩を掲げる（『全集』一九八頁）。これは『八閩通志』卷七十三の海雲樓についての記事（『全集』一八七頁）の補足史料として用いられたもので、上記の付箋はその抜き書きのための目印であったことが分かる。その三は、五の増補「四」であって、校者補記によれば、「著者の遺稿には此の項（心泉學詩稿）につきて、『補欠』と註記せり。後日補訂の意ありしことを知るべし」とい

重陽
黃花彈似鵝白髮忽驚新
爭教參軍懶推處士巾
折腰寧不辱有酒本爲貧
他愛南山色相看意轉真
題海雲樓下一碧萬頃亭
倚欄心自澄萬頃一磨
鋼欲盡重不稱長言言更窮
陰晴山遠近日夜水西東
此意如誰會幽遠獨釣翁
心泉
來尋萬古意聊結此生緣
久視無物中閑只見天
靈根在處覓露珠晚初
斜白髮今如此持杯憶少年
石潭觀魚
拂石撐頭久關心
寂初不知潭豈水爭覺我非魚
欲數猶疑幻相看
若在虛皇雙鬢影何事入方諸

図4 『心泉學詩稿』桑原貼付紙片

う（『全集』二三九頁）。なお海雲樓の詩は、前述のごとく、既に『華化考』の書評中に引用されているので、これらの書き込みも一九二四年にはなされていたものと推測される。

3、『釣磯詩集』四卷

本書は宋の遺民邱葵の詩集であり、その中に蒲寿庚に与えた詩があることから、前述のごとく、陳垣は『心泉學詩稿』とともに桑原に贈ったのである。一帙錢裝二冊、二八・〇×一八・六厘。写本及び帙の体裁は前書と全く同じであるが、本文の筆蹟は異なる。表紙の次に挿添された白紙に、次のような陳垣自筆の献辭がある（図5）。

釣磯詩集四卷、宋遺民泉州邱葵撰。葵為呂

大圭弟子。大圭死於蒲寿庚之難、而本集卷三

有与寿庚兄心泉倡和詩二首、卷四又有挽心泉

居士詩。是葵對於心泉、始終無異詞。然則水声

禽語皆時事、莫道山翁揔不知之說、何自來

乎。疑亦春秋責備賢者之意云尔。敢以質諸

桑原臨藏先生 甲子一月陳垣敬贈。

『釣磯詩集』四卷は、宋の遺民泉州の邱葵の撰なり。葵

は呂大圭（一二二七～一二七五）の弟子なり。大圭、蒲寿

桑原武氏家藏



493484
第7. 5. 30

勅撰詩集四卷并遺民衆州印奏撰奏爲呂
大奎弟子大奎死於蒲壽成之難而本集卷之
有与壽成兄心泉偕和詩三首卷之四有挽心泉
居士詩是蔡材於心泉始終無異詞此則水清
禽語時声莫道山前掩只知一洗何自來
予疑亦春秋書傳賢者之言云尔顏以贊諸
桑原澤藏先生 甲子月陳垣敬贈

図5 『釣磯詩集』陳垣獻詞

庚の難に死するも、本集卷三に「寿庚兄心泉に唱和する詩」
二首有り、卷四に又「心泉居士を挽む詩」有り。是れ葵は
心泉に対して始終異詞無きなり。然らば則ち「水声禽語皆
時事、道う莫かれ山翁総べて知らず」の説は、何れより来
たるや。疑うらくは亦た春秋の賢者を責備するの意と尔か
云う。敢えて以て諸を桑原隲蔵先生に質さん。甲子（一九
二四）一月、陳垣敬贈。

これは、わが国でもこれまで紹介されなかった陳垣遺墨の
一つである。文中の水声云々の説とは、『八閩通志』卷八十六に

記された逸事に出てくるもので、書生が蒲寿成に献して
その狡黠さを非難した詩の一句である。この句は『蒲寿
庚の事蹟』五の註⑬「退隱後の蒲寿成」の項『全集』
二二五頁に引用され、また『四庫提要』卷一百六十五
にも引かれている。陳垣の質問に対して桑原がどのよう
に答えたのか、興味深いことではあるが、そのことを知る
資料はない。前書と同様、この写本も桑原は大切に扱
い、書き込み等は全く施していない。ただ蒲寿成の詩の
ある頁には紙片が挟まれており、これに目を通していた
ことは確実である。

ところで『釣磯詩集』は四庫未収で、伝本は極めて少
なく、わが国では静嘉堂文庫に帰安陸氏旧蔵の旧抄本が存するの
みである。本書の伝承経緯については、この静嘉堂蔵抄本に付さ
れた諸序跋によって知られるが、特に卷首の陸心源の序に詳しい。
彼の文集『儀顧堂集』卷十九にも本書の序跋を載せるが、文章は
序に比べると簡略である。

邱葵の詩集は、元代初めから明代中葉まではただ抄本がその家
に伝わるのみであったが、万暦年間に邑人林霍が借得して始めて
世に出し、彼の師盧若騰が校正し出版を謀ったが、果たせなかつ
た。孫殿起『販書偶記統編』^③卷十三に、「釣磯漫吟、無卷数、宋

同安丘葵撰、伝抄本」として載せるのがそれであるらしい。註記によると、合計六卷、明盧若騰校、許之嵩輯、首に□□庚子(万曆二十八年一六〇〇?)盧若騰序等があるという。ついで康熙年間に裔孫国珽が詩一九四首を集めて三卷に分かった『独楽軒詩集』を刊行したが、これは足本ではなかった。道光二十六年(一八四六)龍溪林国華が五卷本を重刊し、同三十年(一八五〇)、錢塘羅以智、字鏡泉が鉄樵汪氏所蔵の旧抄本と康熙刊本とを校勘合抄した。収録の詩は二七四首。静嘉堂本はこの抄本であって、羅跋を付し「鏡泉統過」方印が捺されている。また傅增湘『藏園群書經眼録』に著録する旧抄本もこの系統である。最後に、同治癸酉(十二年一八七三)裔孫炳忠が林国華重刊本と羅以智合抄本との詩を合わせ、楊浚の校正を経て刊行した。収録の詩は通計三四六首、それに文三篇を付録し、さらに首尾に序跋等八篇を載せた四卷本であって、これが邱葵の詩集のいわば決定版である。勵耘書屋抄本はこの刊本を抄写したもので、もちろんわが国では唯一の本である。なお近着の『現存宋人別集版本目録』^④によると、道光刊本は南京圖書館に、同治刊本は首都圖書館と上海圖書館に所蔵し、北京大学には李盛鐸旧蔵『邱釣磯集』三卷、清抄本があると記す。また静嘉堂本を同治刊本とするのは誤りである。

以上の陳垣から桑原に寄贈された三種の書物は、いずれも學術

上貴重なものであり、特にその中の二種の抄本は、『蒲寿庚の事蹟』執筆時に桑原が利用できなかったことを知った陳垣が、わざわざ抄写して贈ったのであり、彼がいかに桑原を尊敬していたかがわかれる。桑原もまたそれらを大切に保存するとともに、早速読過して、『華化考』の書評を著し、『西域人』の史料に用い、あるいは『蒲寿庚の事蹟』の補訂史料に利用し、陳垣の交誼にこたえたのである。二人の間にこのような親密な関係が結ばれたのは、専門領域が同じであったばかりでなく、広汎に史料を搜集し、緻密な考証を重ねていくという堅実な學風においても共通していたことによる。当時、中国の學者が陳垣を「中国の桑原」と評したというのも、二人の學風からしてもっともなことである。

① 『蒲寿庚の事蹟』増訂版の羽田亨「本書の発刊について」。

② 『全集』では「中古」とするが、『史林』では「中世」となっている。

③ 上海古籍出版社、一九八〇年。一九五九年上海中華書局が重印した『版書論記』の統編で、孫殿起の没後、助手の雷夢水が整理したもの、兩書とも清人を主とした著述総目である。

④ 全宋文研究資料叢刊之一、四川大學古籍整理研究所編、成都、巴蜀書社、一九八九年。この目録では、道光刊本を道光二十六年汲古書屋刻本、同治刊本を同治十三年刻本とする。

⑤ 『陳垣來往書信集』一六九頁、顧頤剛、一九二五年四月十日來函。

〔傳〕彦長系留學日美兩國學音樂者、芸事之外酷好研究歷史、傾心于那珂・桑原二公、謂先生為中國之桑原、故渴欲一謁也。

三

「桑原文庫」には、一九二四年に贈られた書物のほかに、なお三種の陳垣寄贈書がある。これらは前者とちがって、別々に贈られたものである。

1、『増訂再版元也里可溫考』 綫装一冊 一九一七年

「桑原博士指正／著者敬呈」

2、『二十史朔閏表』 一冊 一九二五年 北京大学研究所国学門叢書之一

「桑原隲藏先生指正／陳垣敬贈十五年四月廿三日」

3、『明季之歐化美術及羅馬字注音』 綫装一冊 民国十六年

(一九二七)九月北京輔仁大学用王氏鳴嘯廬藏本景印

「桑原隲藏先生惠存／陳垣」

以上の三種はいずれも公刊されており、特に1と2とは有名なものであるから、あらためて解説するまでもない。ただ1は、二人の関係を知る上で注目すべきものである。

『元也里可溫考』は、陳垣の宗教史の処女作で、歴史家としての名声を高めたことになった論文である。一九一七年五月七日に完成して同月十日に初版が出版され、同年八月二十八日に増訂再版、一九二〇年十月に『開封一賜樂業教考』と合訂した増訂三版

が出された。「桑原文庫」には三本とも存在する。その後も増訂が重ねられて、一九三四年に題名を「元也里可溫教考」と改めたものが決定版という。^① 1には年月が記されていないので、これが何時贈呈されたのが問題になる。

ところで前稿で、「二人は面識がなかったようである」と述べたが、それは当たっていないかも知れない。確かに桑原が中国に留学したのは一九〇七年から〇九年の二年間であって、当時陳垣はまだ広州にいたので、二人が会う機会はなかった。一方、陳垣の方も一度日本に来ているのである。王明沢「陳垣事迹著作編年」によると、陳垣は一九一七年十月二十九日上海を離れて日本に赴いた。旅行の目的はキリスト教会史の史料を訪求することにあつた。同年十二月八日付の東京から慕元甫に宛てた書信中に、「垣のこの旅行の目的は、大半達成した。手に入れたと思うていた『貞元釈教目錄』は、西京で得られた」とあるので、この年に京都にも来ていたのである。しかも「拙著『也里可溫』に、こちらの学者は頗る歓迎を表した」と記し、この時、学者たちに会って『元也里可溫考』を贈ったようである。もちろんその学者の中には桑原も含まれていたであろうし、『元也里可溫考』は増訂再版本にちがいない。したがって「桑原文庫」のものの(1)もこの時、すなわち一九一七年十一月ころに、陳垣が桑原を訪問して親しく

贈呈したものであったと推測される。しかし会わずに、人に託した可能性もある。実は前掲『釣磯詩集』に陳垣の名刺がはさまれていた。その肩書は「衆議員議員」とあるので、この時に渡されたものである。^④その左辺に「手示敬悉知／念并聞」と陳垣の墨書があり、手紙の遣り取りだけであったかも知れない。要するに確かな事は分からないが、『元也里可温考』の贈られたのが一九一七年十一月ころであり、これより兩人の交わりが始まったのは間違いないであろう。

また2と3とによって、一九二四年以後もお互いの交流があったことが知られる。さらに下って、一九三〇年、桑原の友人、門下生たちによって、彼の還暦を祝賀する論文集が編纂された時、陳垣は外国人としてただ一人これに加わって、「大唐西域記撰人弁機」と題する論文を寄せた。この『桑原博士還暦記念東洋史論叢』はその年十二月に出版されたが、翌年五月、桑原は六十一歳

の生涯を閉じた。したがって二人の交誼は、最後まで変わることもなく続いていたのである。

最後に、筆者は一九九〇年の学会の席上、長年陳垣の助手をつとめられていた、北京師範大学教授劉乃和氏から、いろいろの思ひ出話をうかがった。その中で特に印象に残ったことを一つ。陳垣は桑原の教科書を高く評価し、いつも机のそばの書架に置いていた。また劉氏らにも読むように勧めたとのことであった。彼が桑原の学問をよく理解していたことを示す話である。

① 『陳垣學術論文集第一集』五六頁の陳智超氏校記による。

② 二注①の『學術論文集』四六四頁。

③ 『陳垣來往書信集』九頁。この書信によると、訪書のため大阪へも行っている。

④ 一九一三年一月十日、袁世凱が国会を召集し、陳垣は新聞界から選ばれて衆議院議員になった。王明沢前掲論文四六一頁。